

四、アイデンティティーと人生

ロバート・アンドレーの名著『アフリカン・ゲネシス』によると、人間の本能的欲求のうち、一番強烈なものは、アイデンティティー（自分が人によって認められること）であり、人間が本能的に最も嫌うものはボアトム（退屈）であるという。

そういえば、聖書にも、一人の生命は地球にも代え難いほど大切なものだという教えがある。また人は自分の名前が忘れられたり、自分の存在が無視されたりすることに、おしなべて最大の侮辱を感じるものである。面子を保つということがどんなに深い人間性の欲求であるかについても、われわれは日常よく経験することである。これはアイデンティティーを希求する本能の発露というべきである。お互いも日常の生活において、人の名前を覚え、その立場を理解することが、人生のあらゆる営みにとっていかに大切なことであるかをよく経験する。セールスマンの成功は、相手の名前を覚えるだけでなく、更にその人の立場、その趣味、その関心等にどれだけ

ずからが溶け込むことができるかにかかっておるといわれる。組織の運営は人事管理の巧拙にかかり、教育や政治、更には身近な選挙の成否も、人の心をどこまで掴むことができるかにかかっておるといえよう。

文化の進歩に伴い、国家の組織、経済の構造、社会の仕組みは愈々、複雑になり、いうところの人間疎外の現象が随所に拡大再生産されつつある。しかし、われわれは、そういう傾向が強まれば強まるほど、対人関係への配慮は周到且つ緻密でなければならぬ。現象は複雑多岐であるが原理は極めて単純明快である。アイデンティティを求める人の本能に対する周到な配慮がそれである。これがあってこそ、ドライな世の中、孤独をかこつ世の中に、生きがいと潤いをもたらされることになるといえよう。